

シリーズ：地球・この星の住民として

# 地域医療に 生きる

文 小林敏行 / 写真 倉橋 正

一人でタクシーに乗り、診療所にやって来たおばあさん。診察室から出てきた佐藤先生が話し掛けると、なにやら楽しそうに報告をしていた。



ヘリカルCT、電子内視鏡、超音波診断装置など大きな病院並みの医療機器を装備。ヘリカルCTの結果を真剣に覗き込む人、電子内視鏡の結果を聞く人、それぞれに組上の鯉。結果が「白」だったことを聞いて、どちらもほっと笑みがこぼれた。隣の部屋には歯科診療所も併設されている。



新見市哲西町は岡山県の西北端、広島県と接する豊かな自然に囲まれた山の中の町である。その町の真ん中に位置するのが「きらめき広場・哲西」の建物。診療所、庁舎、図書館、文化ホール、保健福祉センターなどが一カ所に集結している。診療所には朝早くから次々と患者が訪れる。やはりお年寄りが多い。待合所には20脚ほどの椅子席と6畳の座敷がある。



### 無医町からの脱却

医療の崩壊が社会問題化している。

特に離島や過疎地では、医師不足がますます深刻化する一方だ。医療は極めて専門性が高いこともあり、これまで自治体や住民の側から医療のあり方や将来方向について踏み込んだ議論をすることは稀だった。しかし、今日の

医療を取り巻く厳しい現実、地域社会全体を考える文脈の中で、自分たちの地域の医療をどのように築いていくか、医師が来てくれる地域にどのように変われるか、住民自身に自己変革を迫っている。

このような状況の中、行政、医療、保健、福祉が一体となったある町の『地域包括医療』が注目されている。

岡山県新見市哲西町。その中央部、約2万5000㎡の敷地には、きらめき広場・哲西」と呼ばれる医療・保健・福祉・行政教育・文化などの立派な複合施設がある。住民の利便性を考えて正面に診療所を位置させるとともに、図書館、庁舎、保健福祉センター、

生涯学習センター、文化ホールなどがひとつ屋根の下に中庭を囲むように配置され、住民はバリアフリーの回廊を通じて自由に行き来できる。

哲西町の人口は約3200人、高齢化率37%。住民の3人に1人、約1000人が65歳以上である。そのうち190人はひとり暮らしという。典型的な過疎の町である。この町もかつて1年2カ月の間、無医町だった。だが、今や地域医療に燃える若い常駐の医師が2名、歯科医までいる。

では、この町がいかにして医師を迎え、自らも変革を遂げたのか。

時は遡って、1997年。旧哲西町は10年間の町のマスタープラン作成に取り組んでいた。住民の要望を反映させるため、今後のインフラ整備に何が必要かと思うか全町民にアンケートを実施した。将来この町を支える大人となる高校生や中学生の要望まで取り込んだ。その結果、実に3分の2の町民が第一番目に診療所の設立を望んでいることが分かった。急病になってもすぐ近くに医師がいなくないことに対する住民の切実な願いであった。当時の深井正町長は、直ちにマスタープランの基本コンセプトを、住民が最も望む医療サービスを行政サービスの中心に据えることに決定。診療所のほかに要望の多かった幾つかの施設を

合わせて一カ所に複合施設として集約することにした。その時点では診療所の医師は未定のままインフラ建設着手を決定したという。

医療施設のデザインに当たって医師の知見は不可欠だ。深井町長は、当時島根県隠岐島で地域医療に取り組み、保健・医療・福祉と行政の一体化実現の中心的存在だった佐藤勝医師の存在を知る。

「深井町長から診療所建設のアドバイ스가欲しいと何度も依頼があつて、手伝うことになりました。われわれは医療のことは素人なので、ただアドバイスをしてくれればいいのだから。でも、気が

ついたら哲西町診療所の医師になりました。今でも飲んだ席では町長に騙されたと言っています」

深井町長は初めから「哲西町に来てください」とは口にし



哲西町診療所の医師は佐藤勝診療所長と総合医の中圭介医師(ともに自治医科大学出身)の二人体制、そして看護師、事務スタッフで構成される。休日・夜間も当直の行政・福祉施設スタッフからの緊急連絡があれば往診し、24時間365日の診療を支えている。



そっと手を取り、優しく話しかけながら診察をする中医師。老人の顔がいつの間にか子どもになった。



スタッフはお年寄りに優しい。誰もが皆、腰をかがめ、あるいはしゃがんでお年寄りと同じ目線になって話していた。薬の飲み方の説明や次回の診察日時を相談するのはもちろん、帰りのバスの時間なども調べて伝えている。バスは町内運行の全便がここを経由するよう組まれている。座敷では自宅の茶の間さながらに、電気コタツに寝そべてテレビを見ながら診察の順番を待つ人も見える。

夕方6時から始まったスタッフの連絡会議。情報を全員で共有することが主な目的。その日は看護師から、ある独居老人の患者が午前の予約をしておきながら診療所に来なかった理由について報告があった。ケア・マネージャーに電話して老人の様子を確認しに行ってもらい、老人の無事が分かったという。こうしたきめ細やかな心遣いと医療・福祉・保健のスタッフ同士の連携が「地域包括医療」を支え、住みやすいふるさとに繋がっている。



大事か、いつも耳にタコができるくらい繰り返しているんです」保健事業と連携した取り組みもある。成人の生活習慣病は人の成長期である子ども時代の生活習慣にその遠因がある。哲西町では子どもの生活習慣を見直すために、医師・保健師・行政栄養士と養護教諭や学校栄養士などみんなが連携して、子どもと保護者のための講演会、健康教室、料理教室を開催し、食事調査や血液検査を実施するなど幅広い活動を展開してきた。

十数人の早期がんを発見し、月30〜40例の紹介状を書くなど成果を上げるとともに診療所と専門医のいる病院との相互信頼関係が強まっていた。そして、待望の医師二人制も実現した。

佐藤医師は保健、医療、福祉の連携が重要であることを具体的事例で強調する。

「お年寄りが床ずれで皮膚が赤くなつたら、その日のうちにエアーマットを手配するなどの対応を取らなければ、ひと晩で皮膚に穴があき、一晩で骨が見えるまでになつてしまつてしまいます。放置すれば治療に1カ月以上掛かるのです。医師の往診は月に1〜2度だけしかできませんが、毎日訪問してお年寄りの体を拭き、下着やおむつを交換するホームヘルパーは患者の変化に最も気づきやすい立場です。しかし、気づいても医師やケア・マネージャー、エアーマットの貸出業者に連絡しなければ結局何も見なかつたのと同じです。連絡があれば医師は診察履歴を照合し、すぐに往診して適切な対応を取ることができます。だから、私はすべてのスタッフの連携がいかに大事か、いつも耳にタコができるくらい繰り返しているんです」

当初は、こんな小さな町に高価な医療機器など不要と反対する人もいたが、深井町長の「道路や橋も重要だが健康問題は一番重要。道路や橋の建設費に比べたら医療機器など安いもの」とのひと声で、当時としては最新のヘリカルCT、電子内視鏡、超音波診断装置など都会の大病院並みの医療設備が整備された。

4人の子どもの父親である佐藤医師は、診察をするだけでなく、自らも中心となり「健康福祉まつり」など、さまざまな催しを企画。CTスキャンした人形や野菜を言い当てるクイズをするなど、いろいろな機会を捉え、工夫を凝らして子どもたちからお年寄りまで医療や検査に関心を持たせるプログラムを実施した。こうした努力により、住民の検査受診率も高まっていた。住民の掛かり付け医として、あらゆる科の二次医療機関として、紹介先の病院へ検査結果を提供することで専門医がすぐに治療を開始できるようになった。これまでに三

なかつた。しかし、診療施設のデザイン段階から直接関わり、自分の考えが最大限尊重されれば完成した診療所で自分の理想の医療を実現してみたいと思うのは人情といつもの。医師としても当然である。

「僻地でも、条件さえ整えば地域包括医療はどこでも実現できるんだということを証明しようじゃありませんか」

柿の実が熟すのを待っていたかのような深井町長の一言で佐藤医師の心は決まった。島根から岡山へ、地域医療担当医師の他県への異動は、無論すんなり行くはずもなかつたが、深井町長の巧みで緻密な招聘活動と県などへの交渉、そして佐藤医師の地域医療に対する熱い思いが困難を克服した。

地域包括医療へ、若き医師の挑戦



すべてはこの人、深井正・前町長の「住民が一番望むものを行政サービスの中心に置くのだ」という強い信念のもとに始まった。保健、医療、福祉のほか行政、教育、文化など、各種機関を一カ所に集約した全国でも全く新しいタイプの複合施設「きらめき広場・哲西」の産みの親だ。穏やかな語り口の中に、人を説得しその気にさせるリーダーシップを感じる。



往診が終わって、次の往診先に向かうまでのつかの間。軽い世間話をする。



オープン・スペースにある図書館。冬季は床暖房が入る。

地域包括ケア推進会議には診療所医師、看護師、保健師、市民団体、学校、行政機関の代表者などが結集。次々と前向きな意見が出る。あくまでもプラス思考だ。



特別養護老人ホームへ往診。診察がひと通り終わると、今度はケア・マネージャーと綿密な情報交換が待っている。



(上)看護師が運転する車で往診。おばあちゃんが家の前でニコニコしながら待っていた。(下)この手すりやスロープは、転んで怪我をした在宅患者のために介護保険で最近設置してもらったもの。往診の際に佐藤医師がその場で福祉スタッフに電話連絡し、後日さっそく取り付けてもらった。「申請すれば取り付けてもらえるよといわれても、病人を抱えた家族が自分で書類を取り寄せ申請するのは実は大変。地域包括ケアに取り組むスタッフ同士の連携が密であれば、電話一本で次の必要な措置が取れるんです」と佐藤医師は言う。



往診を終え診療所に戻る頃は、すでに暗くなっていた。

「ことである。哲西町が証明したことは、僻地であっても条件さえ整えば地域医療を志す医師の下で『地域包括ケア』は実現できるということだ。

哲西町に他の地域と比べて特別なことはない。僻地であっても条件さえ整えば地域医療を志す医師の下で『地域包括ケア』は実現できるということだ。

「哲西町には約1000人の老人がいます。その一人でも多くがボランティア活動に参加することで生きがいを持ってほしいと思っています。老人会の人たちには、みなさんが病気を元気で長生きすることが町にとって一番の貢献なんですよ、と語っています」深井前町長、佐藤医師とも同じ言葉を口にした。

「その著書『成熟社会(The Mature Society)』の中で次のように述べている。「成熟社会において最も価値ある人々とは、最も生産的な人々ではなく、最も創造的な人々でもなく、自分自身幸福であり、善意と幸福とを自分の周りに拡げることができる人々ではなからうか」

「哲西町には約1000人の老人がいます。その一人でも多くがボランティア活動に参加することで生きがいを持ってほしいと思っています。老人会の人たちには、みなさんが病気を元気で長生きすることが町にとって一番の貢献なんですよ、と語っています」深井前町長、佐藤医師とも同じ言葉を口にした。

「あんな何を言ひよる。哲西町では年会費千円を自分で払ってボランティアしようよ」

行政から支援費が出ることを、当り前のようになっている他地域の人たちが驚いたのは言うまでもない。

現在、哲西町では二百数十人がボランティア登録している。それを支援するための組織として、2005年に深井前町長や佐藤医師が中心となってNPO法人「きらめき広場」を設立した。ノーベル物理学賞の受賞者であるテラス・ガボール

合併で高まる住民のボランティア意識

2005年、哲西町は住民投票を経て隣接する新見市と合併、役場庁舎や保健事業のスタッフも多くが新見市本庁に異動した。自治体の合併は小さな町の行政サービスが低下する場が多い。合併により哲西町が取り組んできた「医療サービスを中心とした行政サービス」は、予算上も体制上も厳しい制約を受けざるを得ない。

住民の自律性が問われている。深井町長の方針は明快だった。「合併を拒否するのではなく、合併とはそういうもの」と割り切って、行政のサービスが低下した分、われわれ住民が苦勞しよう」

行政で対応できなくなつたサービスを住民のボランティア活動で補完しようというのである。合併で深井町長も町長職を退き、哲西町の図書館長となった。

あるボランティア団体の会合で他地域のメンバーが市から支援費が出ないことを報告すると、同席した哲西町のメンバーがさかさず反論した。「あんな何を言ひよる。哲西町では年会費千円を自分で払ってボランティアしようよ」

